

都市工学科創設50周年記念卒業生座談会（40代の部）

「これからの都市工学科に求められるもの」

座談会参加者

A氏（19期）、B氏（26期）、C氏（27期）、D氏（28期）、E氏（28期：司会）

（E）まず自己紹介を兼ねて、これまでと現在のお仕事についてと、なぜ当時都市工に進学したのか、何を学んだのか、という話からお願いします。年功序列ということで、Aさんからお話いただけますでしょうか。

（A）私は卒業後一貫してコンサルタント業界の畑におりまして、3回生が主として作っているエックス都市研究所に入りました。当時社長をしていた3回生の楠本さんが、初めて業界団体というのを作ろうとしたもので、コンピューターメディアが世に普及し始めようとしているときに、それをいかに都市計画に生かすか、という趣旨で、当時は「高度情報通信都市計画シンクタンク会議」という長い名前の団体でありました。同窓会名簿には今も私の所属として載っています。ここで十数年マネジメントをやりまして、そのまま兼務という形で都市防災研究所に入りました。前任は3回生の平井さんでした。普通の常識では転職ということになると思いますが、伊藤先生にしてみれば人事異動という形で、エックス都市研究所から都市防災研究所に移り、今の身分になっています。従って同窓会名簿には今でもこの二つの組織に両方所属しているかたちです。

なぜ都市工学科に来たかという、私は極めて文化的な動機でありました。ちょうど高度成長期のときに、将来をどうしようかなと物事を考え始めた時期があり“いけいけどんどん”は失速するだろうと、当時から言われ始めていました。ローマクラブの成長の限界のような話が目の前をポンポンよぎっていたわけです。もし10年早かったら、普通の理科系の技術者に黙ってなっていたでしょう。つまり科学を純粋に信じて、それが世を治めるだろうと牧歌的な道を歩めたのではないかなと今でも思います。しかしそれがそう単純じゃないとハッキリしてきたときに、じゃあそれをどうするかと考えたときに、そういうネタというのは商売にしにくいということを感じ、だったらそういう問題意識を持ちつつも飯の食える方法はないだろうか、と消去法で選んで行った分野が都市計画でした。この選択は今でも間違っていなかったと思っていますし、その問題意識も仕事にそれなりに役に立っています。それだけを喋って直接お金を稼ぐというのは難しいと今でも思っていますが、このジャンルは建築や土木の延長としてスタートした人も多いと思いますが、しかし

その延長では都市はとらえられない、ということで昭和 37 年に都市工がスタートしていますし、ここは学科の在り方論を考える上で大切な話題になるだろうと思っています。

(B) 私は 1993 年に三井物産に入社、情報産業本部に配属され IT 関連の業務に携わり、その後情報産業やコンシューマー・サービスの分野で複数の国内外の関係会社・提携先に出向しました。パブリックビジネスという事業に携わった時に、都市工の先生にお世話になったこともありました。その後、三井物産の広報部に行き、会社案内や、社内報を作る部署の責任者をやっていました。現在は再び情報産業本部に戻ってきています。

私は学部で当時の環境衛生コース、今でいう都市環境工学コースに入り、その後修士課程を都市計画コースで学びました。今、A さんのお話にもありましたが、建築・土木では語れない、都市を切り口に様々なことが学べるというところに惹かれて学科を選択しました。都市工から弊社に来たある先輩は、都市工は工学部のリベラルアーツだと表現していましたが、まさに経済、社会、政治、文化など色々なものを融合させて行くのが都市であり、それに色々なかたちで携わって行く、というところに興味を引かれましたし、それを学べた事は価値があり有意義だったと思っています。

(C) 私は、現在国土交通省の土地・建設産業局におりまして、ここは土地政策、建設産業政策を所管する部署です。もともとは建設省に就職し、建築職で入ったということで、主に都市局や住宅局など建築、都市、住宅といった分野の仕事をしてきております。

進学理由は、建築学科は当初念頭にあったなかで、自分は手先もあまり器用ではないし、それを極めるという専門性はそこまでないなということ認識し、都市工学科へ進んだ、というのがわかりやすい動機です。

(D) 私は卒業後住友不動産に入社しました。そして不動産ビジネスに従事していく中で、MBA 留学をする機会を得て、学位取得後にメリルリンチ証券にジョインし、そこで不良債権投資から不動産関連の投融資に従事しました。その後、メリルにおける投資チームの主要メンバーで今のマーチャント・キャピタルという会社を創り、現在に至るまで不動産関連の投資を継続して行ってきております。そういう意味で、不動産に根付いたビジネスを構築し継続することの一貫性をもって自分のキャリアを構築してきたと言えます。

不動産ビジネス自体には、実は大学入学前から関心がありました。私が高校生の時分には、港区の林野庁の地上げ問題が取沙汰されており、ちなみにその議論で槍玉に上がっていたのが住友不動産だったと記憶しておりますが、そのように高度経済成長を終えてバブルが来る、という時代背景に、不動産ビジネスを対象としたメディアが実に多く、そうい

う要因もあって私の関心は不動産に向いていたと思います。そのような環境下で、進学するにあたって不動産を学問として志向できる大学はどこかと考えた時、これがあまり多くなくて、当時では東工大、早稲田、千葉大、そして東大、くらいだったと記憶しております。そのなかで、一番チャレンジングな東大入学を目指し、入学後も進振りにて都市工学科に進学できるよう努力をしました。都市工学科進学後も、不動産にこだわりがあったということで、コースの選び方や就学の仕方もそれに関連するものに絞って取りました。研究室も、不動産の開発に関わる諸法や規正の誘導について見識が厚いと同時に拝聴した森村研をお願いをしました。卒論の研究テーマは、バブル崩壊直下時の当時に、不動産の開発における行政のアグレッシブな容積誘導ということで再開発地区計画制度を研究対象としました。この制度がバブルを招いた一因かもしれないなど、世の中の経済活動と併論される不動産に関する 이슈を、いろいろな意味で学科に居ながら引き出す事ができたということは、加えて自分のこだわりや目指している方向について様々な知識を吸収できたという点で、都市工に感謝しながら卒業できたと思います。

(E) 私は卒業して三井不動産に入りまして、いくつかの部署を経験し、現在は子会社の三井不動産投資顧問というところで不動産の私募ファンドの運用を担当しています。主な投資家は個人ではなく機関投資家ということで、機関投資家の方々と意見交換をしながら、そのニーズに沿ったかたちで運用をしています。もともと私は不動産の証券化に携わりたいと考えており、都市工の卒業論文もアメリカのリートを対象に研究をしていました。いずれ証券化をやりたいと思ってはいたものの、入社後なかなか機会がなかった中で、33歳の時に会社のそばの日本橋に早稲田大学のファイナンスの大学院が出来るということで、そこに仕事の傍ら通い無事修了しました。その後リートの実用会社に行き、今は私募ファンドの実用会社にいるということで、希望通りの仕事ができている状態です。

なぜ都市工にはいったかということ、ポジティブとネガティブな理由の両方があります。ポジティブな方とはいうと、私は横浜で育ち、MM21の開発などをみてきたこともあり小さい頃から都市開発に興味があったということです。理科一類ということで、選択肢は色々ありましたが、都市工は希望していた進学先のひとつでありました。一方ネガティブな方とはいうと、大学に入学するまでは数学と物理は得意なつもりでしたが、入学してからはそれが全く分からなくなってしまった。特に数学は哲学のように思えて、数式アレルギーにもなり、3年4年はこの数式を見なくて済む学科に行こうということで都市工に進みました。

それでは自己紹介が一通り終わったということで、今お手元にある都市工学学科のWEB

サイトのコピーを見ていただいたうえで、昔と今とで何が変わったか変わっていないかの意見交換を自由にしたいと思います。

(D) そもそも当時はホームページなどなかったですから、情報として比較できるものが厳密にはないと思うのですが、過去の記憶から辿ってみると、あまり変わっていないなと感じます。ひとつだけ言えるとするれば、先ほどの皆さんの会話でもありましたが、いろんな専門性の可能性が秘められている学科であるし、Aさんもおっしゃっていましたが、ひとつの専門分野にしばられない、修学に関しては含蓄のある学科だと当時から感じていました。その意味では、今のカリキュラムも、自分の目指すものに沿って科目を選択できるような構成になっているのではないかなと一義的に感じます。

(E) 私も同じ印象です。もちろん講義の中身そのものは時代の流れに応じてアップデートされているとは思いますが、講義の名前はほとんど変わってないようです。

(D) これだけ IT 環境が高度化する中で、算法通論はさすがに別形態になっているのではと思っていましたが、まだ存在しているので、驚いたというか、その内容がどういう修学内容なのか興味あります。

(E) Bさんがとられた当時の環境衛生コースは、今は都市環境工学コースと名前が変わっていますが、それ以外に何かありますか。

(B) 授業名を拝見する限りは、実験中心なところも、広く様々な科目を学べるところも、基本は変わらないなあと思いながらカリキュラムを見ていました。

(A) 私のもっと上の代の一桁代の回生の方々の時代は、時間割は無かったと聞いた事があります。当時のエピソードのなかで、都市工だけ法学部の授業ばかりとって、最後に弁護士になった人もいたそうです。

(B) 昔から他学部の授業が単位として自由に取れるようになっていたのでしょうか。

(A) 都市工をつくった当初は、そういう過激な、分野を超えるというアクションに先生方がやたら熱意を示していた。私の頃になってくると、少しその反動が出ていて、やはり自分の畑がないのは変ではないかという話になり、今のこのようなカリキュラムになった

ように思う。算法通論とか構造力学とか、必須科目ではないけど、あるジャンルの科目からは何単位とらなくてはいけないというふうになっており、ずっと他学部の授業に出ていてもいいという過激な状態ではなくなっていたのが私の時期であります。ただ、私はそういう学科であると知っていたから、法学部の授業も経済学部の授業もしばし聞きにいったりして、分からないなりに後日役に立ったりしているところがある。本でしばしば出てくる法律や経済の理論の話などを、ちゃんと本物の授業で聞くことができたことはよかった。この程度のことは皆知っているのかなと思っていたが、後日分かってきたことは、皆そういうことを全然知らないということ。色んなジャンルにおける「いろはのいの字」というのは、ジャンルが違ふと知らない。私の場合、コンサル業界の業界団体の創設をしてきたので、勝手な勉強を自分で進める事ができた。例えば勤務中にサムエルソン経済学を読破しちゃう、なんてことも出来た。これは「いろはのいの字」を知っているからできちゃう。そういう意味で、私は学際的な活動をやるという都市工の趣旨に沿った、卒業後の展開をしてきたといえる。

ただ、これは卒業生の苦しみにもなっているはず。自分がなにをやったのかははっきりしない。発足当時の何でも良かった時代の反動でカリキュラムを固めるようになったのは、あまりに居所が分からないという一抹の苦しみがあったためだ。建築や土木のような専門性を再び引っ張り出してきた時期が合った。これは学際的分野を指向するというときに、永久についてくる問題である。初学者にありがちな教科書ひとつマスターすれば良い、ということ打破することを目的として創られた学科だから、カリキュラムを組むのは難しい。どの教科書を持ってきたって、趣旨から外れちゃう。固定した教科書がない。その苦しみを感じるカリキュラムだなあ、という感じ。どっかに偏ってもまずいし、それでいて何か与えないと学生は居場所がなくなっちゃう。

(C) 私はあまり細かくカリキュラムを覚えていませんが、まちづくり大学院が新設されたことは大きく変わったなという印象です。今の話にあったように、都市工が一専門性にとどまらないというところからスタートしたということとは、色々関連性があるなどは思いますが、都市工の卒業生にしか持ち得ないノウハウというものが専門性として身に着くといいのだろうなどは思うところです。どう人材を育成するかという話にも繋がると思いますが、学際的分野なのでそれはないです、とならざるを得ないのかな、とも思っていたところです。

(B) ビジネスをしようとする、分野をまたがった視点が必ず必要となってきますよね。具体例でいうと、まちづくりの一環として、新興国で足りないインフラを整備するプロジ

エクト、例えばブラジルで新しく地下鉄を整備する、あるいはメキシコで下水処理サービスをゼロから立ち上げる、といった事業は商社の仕事の一つですが、これを実現するためには、まちづくりの知恵だけではなく、長くサービスを続けるに足りるスキーム作りやファイナンス、更には政治的なネゴシエーションも、文化的な合意も必要。これらの組み合わせがうまくコーディネートされてはじめて、各国に喜んでいただける事業が成立するわけです。まちづくりには規模の差や環境の違いこそあれ、同じようなコーディネートが必要で、都市工での学びはそういうことを意図しようという意味では、専門性がないというよりは、広く分野を見てフレキシブルに動けるのが専門性なのかな、と思っています。

(C) 勉強の延長線上の専門性というよりは、実践に活かせる、というのが特徴であったり専門能力であったりするというのでしょうか。

(D) 今の話に同感で、かつ私自身の過去を思い出すと、同じような意識を持ちながらキャリア構築してきている部分が多いです。私の場合は不動産関連投資ビジネスという実業ですが、そこではファイナンスの知識だけでなく、建築の知識、ときには構造とはなんだといった知識が必要となることもあります。そこで都市工ならではのバックグラウンドでもあります。細かいあるいは深い領域までは掘り下げずとも一定レベルの見識はある、ということ、これがビジネスの判断をする上で非常に重要です。また、ひとつのビジネスをやるにしても、それが分岐して行く中で、都市工ならではの支え、それは知識だけでなく、諸先輩方があらゆる分野にいるのでヒアリングしに行きやすい、ということもあるように思います。つまり縦の繋がりが強いということも都市工の特徴であり、その意味でも非常に感謝する部分が多いです。

また、私はMBAを取得しましたが、そこでも不動産にこだわっていたことと、都市工のアカデミックな雰囲気を追い続けていたことが、学位取得の明確な目標になっていたと思います。MBAでは自分の専門性・志向性に基づいてカリキュラムをとっていくシステムになっており、私の場合はファイナンス、不動産、アカウンティングの3つのメジャーに焦点をあてましたが、結局それは、自分に足りない知識の習得に加え、軸である不動産ビジネスにおいて今後目指すキャリアに必要となるであろうという知見をメジャーにて取り込んだわけです。そこで立ち返ると、都市工も、当時カリキュラムなりコースなり、あるいは学問なりを“選ぶ”ことができたという点が同じであるように思います。私にとっては都市工学科は取りたいものを取る機会を与えてくれた、確かに多様性がありすぎるあるいは幅広になりがちではあるが、ひとつ軸を決めると、それに集約していけるような知識の積み方、修学の仕方ができるのが都市工だったなと思います。軸さえ決めれば、自分の

専門性や方向性を強めてくれる学科であったという感覚を今でも持っています。

(E) ではちょっとテーマを変えまして、今後必要となる講義テーマとしては何があるでしょうか。カリキュラムが変わってない一方、世の中は大きく変わってしまっていて、それを踏まえてお話しください。

(A) 都市工学科の教科書が書けるか、という話であるとする、それは書けないと言っているのに近いのであるが。しかし学生が入学したときに教科書がない、というのは辛いだろうと思う。

(C) 実践に使える総合的な力ということで、個人的には技術面の話や経済面の話が重要なのではと思いますが、どうでしょう。

(D) 私はたまたま不動産という軸がありましたが、そのキャリアの構築の過程で、経済系などの足りない分野を取りに MBA を取得したわけで、例えばその足りなかった経済学の領域を学部のとときに取るべきだったかという、それは必要なものでは、と思います。個人個人のキャリア構築の中で、必要と感じるビジネス資源は、キャリア構築の都度都度の過程で出てくるあるいは気付く場合がほとんどだと思うので、その時々、知識の集約や構築をしていくのがいいのかなと思います。その意味では、Cさんの意見に呼応しますが、外部の専門家講師とか、人気があるような、時代における専門性の高い人を講師として雇ってカリキュラムを作るのはよいと思います。MBA でも、講師の半分は、高い専門性をもった人たちが時代に合わせて教授や講師に雇われていましたし、都市工もせつかくそういう特徴があるのだから、同時代における専門性の高い方々を雇って構成を組むというのがあってよいと思います。

(E) 私もそこは同感です。早稲田のファイナンスの大学院に夜間 2 年間通いましたが、その講師は、もともと大学教員で転籍された先生もいれば、実務を極められた方が先生に転職して教えているという講義もけっこうありました。また非常勤講師として、各界のビジネスで活躍されている方を頻繁に呼んで講義が展開されていました。私が受けた講義の半分はビジネスマンから教わったことになり、面白かったわけです。都市工の当時の話を思い出すと、昔からそういう要素も少しあり、例えば輪講では毎回違う方を呼んでいましたし、当時その輪講はとても面白くて、輪講で来てもらったコンサルの方のもとでアルバイトをしたり、就職活動時の面接官としてたまたま再会するなど、ラッキーな事もあっ

たりしました。このように輪講はすごく印象に残っていて、もう少しこうした授業があってもいいのかなと思います。

(B) 実は私は今日の座談会に望むにあたって、弊社の都市工卒の7、8人に意見を聞いてきたのですが、その方々からも経済の視点や実業との連携について、いろいろなコメントがありました。一つはファイナンスの重要性。現実の社会では、何をするにもお金の話は切り離せませんし、昔と異なり、今はPFIのように民間のお金をうまく活用して、国や自治体と民間とが協力しながらやっていくということが増えている中で、どの立場・どんな事業でもファイナンスの話は避けて通れないことをふまえると、学部でも（まちづくりの実例などからでも）ファイナンスを学ぶ機会があるとよいといった意見です。更に興味があれば、DさんやEさんのように、社会に出て、あるいは大学院で深掘すればいいのかと思います。

もう一つは、実業との結びつき。社会人からホットな話題を提供してもらおうという点で、今では輪講に加え寄付講座もあるようですが、こうしてフィールドサーベイなど社会に触れることをやっていくことは重要だという意見です。まさに教科書に書けないところ、日々変わっていくグローバルな街の中で何をやっていくかということは、つねに実践的なところに触れて行かざるをえないと思いますので、都市工はそういったところにもともと意識は高いと思いますが、スピードがどんどん速くなっていく世の中で、現場感を培える機会を更に増やしてもいいのかな、と思います。

また、ちょっと話は変わりますが、別の方からこんな話もありました。ITの世界ではIBMに代表されるハードウェアの時代からマイクロソフトに代表されるソフトウェアの時代になり、今はグーグルに代表されるネットワークの時代になりました。これをまちに置き換えると、インフラを整えるハードの時代から、人々が快適に暮らせる環境づくりを目指したサービスの時代になり、今は国内ではそのサービスも整ってきて次の“ネットワーク”時代になりつつある。そういった時代に、都市工がどう携わっていけるかということを考えていかなければいけないのではないかと、という主張があり、私もなるほどと思いました。その明確な答えが今あるわけではないのですが、グローバルなネットワーク社会における都市工の在り方、という視点も考えていくとよいのではないかと、思います。

(A) 最初に都市工の教科書はありえないかもねという話をしたが、その切り口で行くと、教科書がなく、次から次へとソフトや新しいネタを描けることこそ価値を感じてほしい、という時代になっている。すべてにおいてタイミングが大事であり、どんなに良いものでも、旬をのがすとあまり世の中の役に立ちにくくなる。それをいかにうまいタイミングで

パッと世間のお役に立てることができるか、というのが重要になってきている。もしかすると昭和40年の頃に、そういう時代の変化に気がついて、学際的な学科を作ったのではないかと、ということも言えなくもないと思う。つまり非教科書的な価値を目指すのが都市工であるので、そこに教科書を期待されて来るとおかしなことになる。やはり都市工の神髄とは、非教科書的な世界に最後のゴールをもってくるものではないのかと私は思う。それにITの世界などが加わってきちゃうと、本当に非教科書的な何かを追わなくてはいけなくなってきている。こういう局面にきたときに学生さんに提供すべきものは、やはり臨機応変な価値を、集めてきた素材の中に感じてもらう、ということになるのではないかと。それだけ時代性があるべきもの。

(B) そういうものに触れる価値を教える、と。

(A) それが一番のポイントでいいんじゃないかなと思います。

(D) 一方で、学生時代の進振りのときに周りを見てみると、成績が良くないと行けない学科だからただ目指す、という短絡的な人もいた記憶があります。大学で色々考えようとする学生に、どういうベクトルを与えるかは悩ましい学科ではあるでしょう。ひとつの回答としては、先ほどの議論にあったように、実業との接点をより深めるような打ち出し方をするのはどうでしょう。例えば、都市工に行くときより実業に関わっている人たちとの接点が増えますよ、という雰囲気を出して行くとか。そこでの実業とは、建築、不動産、さらには情報産業、コンサルの世界、あるいは公官庁の行政誘導的な面も含めて全方位的であり、都度、時代に合った実務との接点を追いつきやすいのが都市工である、という見出しがしっくりくると思います。

(C) 私も同じですが、都市工には教科書がないということは、やはり紙では語れない実務という話なのかなという気がしています。今は教授の単位、研究室の単位ではやっているとありますが、学科として主体的に乗り出してまちづくりそのものをやっちゃう、という位の話になるといいと思います。もちろん提案レベルの話ですが、その過程の中での気付き、というのは大きい。私は行政の立場ですが、やはり経済の話は絶対に切り離せないと思っています。そうした経済面も含めて、都市工学科では、実業なり実務の面で最低限必要なものは入れこんでいって、その実業や実務に結びつきやすい、ということに重きを置くとよさそうかなという感じがします。

(B) そういう観点からいうと、もうちょっと都市工は発信力を上げていくべきではという話も出ました。これはグローバルなポジショニングを考えると東大全体にもいえることかもしれませんが。具体的な課題として、専門性の明らかな物理や建築といった学科に比べ、実業を担う側から見たときの分かりやすさがどうしても都市工には欠けている。しかし都市工で孵化される能力は、きっともっと認められうるもので、そのためにはもっと自らアピールしなくてはならない。アピールの仕方はいろいろあると思いますが、弊社で広報をやっていたときの経験から申し上げますと、明快なコンテンツとそれを載せる媒体との組み合わせがうまくあえば、きっちり効果がでます。都市工卒で活躍している方の紹介やサクセスストーリーなど、強みや結果を収集・整理してコンテンツを作り、自分メディアとしてのウェブサイトをもっと活用したり、先生方のお力もお借りしてバイラル(口コミ)マーケティングを行ったり。海外の大学、例えばハーバードなんてすごくアピールが上手く、だから企業もくっついてくる。また、更に優秀な学生もついてくる。そういうのを都市工も出来るのではないかと思います。

(D) 同感です。

(A) 私はコンサルの業界団体においてマネジメントをやり、色んなコンサルの社長さんの言い分などを聞く機会があるが、とにかくみんな考え方が違う。この世界ではこうじゃなきゃいけないと突っ張るポイントがあるが、しかし、それはみんな違う。それでいてお互い批判しながらもみんな商売は上手く言っている。そういうのを見ていると、専門分野の価値観というのは、自分の勝手な思い込みになっているところが多々あって、それはもうジャンルに籠って自分で自分を慰めている状態。自分の分野から一步も外に出ない。その外はつまり住みにくい社会。そうして専門に籠ることによって沈没していく部分はあるわけで、それを飛び出さなくてはならないという発想は正しい。ただ本能的に落ち着きたい、という思いがそれぞれにあって、それはもう人間の分業の苦しみという奥深いところに根ざしたものになっている。それを打破したいということは、社会を上手にマネジメントしたい、という思いと重なる。それを一つのジャンルにした、というのがこの学科なのだ。いつの時代にもそうした調整役はいたが、それを職業看板にした者はいなかった。それを職業看板にした我々は、世間にどれだけ受け入れてもらえるのか、というのが問われているのだろう、と思う。人知れず登場し、人知れず消えていってしまう、という面もあるが。

(B) ますますそういう調整役のような役割への期待が増えていると私も実感します。

(C) コーディネーター養成講座、とか。

(B) 一方で、弊社内で話していた際に、都市工みたいな学科って他の大学で増えてないよね、という話もでした。コーディネート力がますます重要となっている中、そういった人材を養成する都市工的な学科が他大に新しくでてこないのだとしたら、発信力の問題と関係あるかもしれませんが、残念な気がします。

(D) 確かに思うのが、テーマテーマを学生が持たないと、入っていても結構ついていけないというか、意味が無いということ。今そういう学科が増えない理由は、もしかしたら今の学生は、ひとつ大きな目標感を持たずに大学に来ていて、むしろなにか与えないと自分の指針が見えないようなことがあるのではないのでしょうか。都市工のような「さあ、自分で考えなさい」という環境は、目標を持った学生にとっては、生きる場所だと思えます。若い人たちの色々なモチベーションが高くなれば、都市工学科のような学科はよりフィットしていくかなと思います。先ほど援用しましたように、別経験ながら MBA でも目標感や最終ゴールを自分で設定しないと意味が無いところがあります。つまりモチベーションが高い人でないと学費すら無駄になってしまう。都市工も実はそういう位置づけにあるのではないかなと感じます。分野としては、都市工学という枠が及ぶ範囲になるとは思いますが、目標感を持った学生には面白い学科になるのだらうと思います。

(E) 話は変わりますが、都市工の卒業生を見ていて思うのが、1期生から一桁台の先輩方は個性的な人が多くて、それは歳のせいなのか、時代のせいなのかわかりませんが。

(A) あれは創設時独特のパイオニア精神だろう。

(E) 何も無いところから作り上げて行くんだ、というところがあって、そういうのはうらやましいなと思っており、私も早稲田のファイナンスは1期生として入学し修了することが出来ました、そのアピールという面でも、よく早稲田の先生方に言われるのは、大学院に戻って来て講義するのもいいが、それよりもむしろ社会のなかでもっと活躍して自分のポジションを上げて行く事が結果的に大学にとってのアピールにもなるのだという点です。そういう意味では、我々の大学のときは熱いものはあまりなくて、ある程度カリキュラムが出来上がっていて、好きにとっていいよという時代だったと振り返ることが出来ます。何か自分で作ろう、というのではなかったが、原点に戻る意味でそういうのがあってもいいのかなと思う。そういう意味でまちづくり大学院というのは、もう一回新しい都市

工を作り上げていこう、ということだと思いますし、それが学部のほうにも波及して行けばいいなと思います。

(D) 確かに1回生の方、かつ2、3、4回生などの創設期の諸先輩の方は、本当に面白く素晴らしい方が多いですね。

(A) 創成の妙というのは突き詰めていくと、一期一会を作り出すことの妙だとは思いますが、それは最後の成果物を磨き上げていったときに、その場にいた人にしかその価値は見せられないものである。そこにいた人しか見えない。その価値が我々の価値だとしたときに、まあ我々の代の活躍は地味だな、と思えちゃうときもある。ここ200年は科学技術の年だと私は思うが、この200年は長い歴史の中では異様な年だったと思う。グローバル化をしたとか、大量生産技術を作ったとか。見かけの技術はそれをもたらすものだったわけで、それを学んで都市工を卒業していくわけだが、この200年の文明をどう位置づけるのか、ということが求められているのでは。我々というのは、この色々な科学技術を学び、調整役となっている。ここが大昔の調整役とは違う。今はとにかく科学技術で皆飯を食っている。原子力の世話になって飯を食っていたりもする。このスタンスの中で、調整はどうあるべきかというときに、いろんなジャンルを少しずつつまみ食いしていないとダメなわけである。分からないなりに分かる、という意味での調整役。昔、調整役は文科系、タコ壺に籠るのは理科系、という住み分けがあった時代があった。しかしそれが行き詰まり、我々は昔文科系がやっていたようなことをやっている。技術がやたら複雑に発達してくると、単なる文系では調整ができなくなってくる。その境目に都市工が出来たわけだ。ちょっと違う調整役なのだと思う。

(D) イノベーションを起こせる学科といえるのか。科学技術には浸っていないから理系性は薄い、文系という観点でくくれる学科でもない。

(A) かつての文科系が果たして居た調整役、例えば法学、経済学、というのがいまいち機能しなくなったのは科学技術の発達のせい。あまりに複雑な技術体系になり、そこにどっぷり浸った生活になっている。そこで我々が登場してきている。

(D) まさにこんな話があって、昔の明治通りと山手通りを、戦後復興時に計画したとき、当初は片側4車線、全部で8車線であったそうです。それを結局2車線にしたのが、大蔵省。でも理系の間は、モータリゼーションを含めて予測をしていた。しかし当時の調整

役であった大蔵省は科学的見地を無視して幅員を小さくしてしまい、結果今の大渋滞を引き起こしている。そして拡幅で大変な出費を引き起こした、やはりそれは、科学技術というものをしっかりと見極めた上での調整役が必要なんだという例証かもしれません。

(A) これだけ複雑になった科学技術に頼っている世界に、我々が何が出来るかが問われている。

(C) 最近的にはまちづくり総合プロデューサーとでも言えるのでしょうか。

(A) 高度成長期の前向きな時代は、すごくリアクションがあり、夢を持てる時代だった。それがひととおりの過ぎると、もとの地味な時代になにがしかの回帰をして行くと思う。そのときに、より美しく、賢い、消費生活を提供して行くのが我々のお仕事なのだ、と思う。これはやはり地味なんだが。

(C) 理系の中だけに限らず、文系も含めて総合的にまとめる、かつ実務・実業に軸足をもち得る卒業生、というのが求められる人材なんだろうという感じがします。

(D) 卒業生を見ていると、そういう人は多いと思います。

(C) どこでどのように活躍している人がいるのかということ、学科としてPRしていくことも必要だろうと思う。

(E) 今日はお忙しい中ありがとうございました。

※参加者の発言内容は全て個人的見解であり、所属する企業・団体等の立場、戦略、意見を代表するものではありません。